小児急性白血病の神経学的所見および心理検査からみた晩期障害

Ⅰ．神経学的所見よりみた晩期障害

（分担研究：小児期白血病患者の生存の質改善に関する研究）

赤塚順一、小林尚明、島崎晴代、星　順隆

要約：小児急性白血病児の晩期障害を神経学的所見から検討した。対象は治療開始後３年以上経過した27例（男15例、女12例）である。身体計測、ＣＴ、脳波、soft neurological signs、ＩＱ、Bender Gestalt試験について調査した。その結果、再発例で神経学的異常を高率にみとめたが、初回緩解維持例（長期生存例）でも、４歳未満の発症例に異常検査値を多くみとめ、リスクの低い若年層に対する治療法の検討の必要性が示唆された。

見出し語：急性白血病、晩期障害、神経学的所見、脳波、ＣＴ

1. はじめに

近年、治療の進歩により小児白血病の予後は著しく改善されつつあるが、それに伴い晩期障害が問題となっている。今回我々は当教室における小児白血病長期生存例の神経学的合併症を調査し検討を加えたので報告する。

2. 対　象

対象は、昭和49年12月以降に発症し、当教室で加療され３年以上を経過した27例で、男女比は15：12、ＡＬＬ24例、ＡＮＬＬ３例である。初発年齢は１歳７カ月から14歳まで中央値４歳で、初発後経過期間は３年11カ月から12年６カ月、中央値６年２カ月である。予防的頭蓋放射線照射はＡＬＬ24例すべてに対し施行している。臨床経過及び治療の相違により症例を以下の３群に分類し、身体計測、ＣＴ、脳波、soft neurological signs、知能検査、Bender Gestaltテストを行い検討を加えた。①再発の既応がありいまだ治療を続けている群７例。②初回緩解を３年以上維持しているが治療を続けている群６例。③３年以上初回緩解を維持し治療を終了した群14例。

3. 結果

身体計測では身長、体重が標準より－2.0ＳＤ以下及び－1.5ＳＤ以下の例につき検討を行った。

東京慈恵会医科大学小児科教室（DEPARTMENT OF PEDIATRICS, THE JIKEI UNIVERSITY SCHOOL OF MEDICINE, TOKYO）

体重に関しては全症例の平均が－0.24ＳＤで3群の間に明らかな差は認めなかったが、身長では－2.0ＳＤ以下が4名。－1.5ＳＤ以下が8名で再発群に低身長例が高率にみられた。脳波は27例中5例に異常を認めたが、その異常は棘波が1例、徐波が4例であり、3群の中で再発群に比較的高率に異常がみられた。soft neurological signsとしてはdiadochokinesisとassociated movement、追視時の頭部回旋、片足とび、片足立ち、choreiform movement、motor impersistenseを施行した。異常例は25例中10例で再発群に高率にみられた。Bender Gestaltテストにおける器質的異常例は再発群28.6％、緩解治療中群50.0％、off therapy群14.2％であった。トータルＩＱが80以下の異常例は、25例中9例で、再発群16.7％、緩解治療中群20％、off therapy群50％であった。発症3年から12年後（中央値6年）で検査された頭部ＣＴの異常は27例中3例にみられた。1例は4歳発症で中枢神経再発を繰り返し、total 40ＧＹのradiationとOmaya-tubeによるＭＴＸの髄注を施行している症例で、ＣＴ上著明な萎縮と多巣性石灰化を認め、臨床的に白質脳症と診断された。他の1例は初発時に視神経浸潤を合併し、現在off therapy中であるが第四脳室の拡大を認めた。3例目は発症4年後の睾丸再発時に右前頭部に低吸収域がみられた症例である。以上の諸検査について初発年齢および生存期間を正常例と異常例で比較したところ、異常例は正常例に比べ初発年齢が低いことが示された。

また生存期間が長い症例に身長、ＩＱの異常例が目立った。さらに全症例を、生存期間5年以上で再発なし、生存期間3年以上5年未満で再発なし、再発例の3群に分け、それぞれ初発月例の若い順に並べて異常検査値との関係をみると、再発せず完全緩解を続ける症例でも幼若初発例はより高率に異常を呈する傾向にあった。

4. 考案

長期にわたる強力な治療を受けた再発群に高率に異常を認めるのは自明であるが、今回の我々の検討では初回緩解を続ける若年発症例にも高率に神経学的異常がみられた。また低身長例は生存期間の長い症例に目立った。このことはリスクの低い若年者に対する現在の強力な治療に検討の余地のあることを示唆している。またＩＱは脳の器質的障害のみならず知的環境に強く影響されるが、初回緩解を維持し長期間観察しえた症例にＩＱ低下例が高率であった事実は、教育・心理を含めた長期的包括的チーム医療が不可欠であることを示している。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:小児急性白血病児の晩期障害を神経学的所見から検討した。対象は治療開始後 3 年以上経過した27例(男15例、女12例)である。身体計測、CT、脳波、soft neurological signs、IQ、Bender Gestalt 試験について調査した。その結果、再発例で神経学的異常を高率にみとめたが、初回緩解維持例(長期生存例)でも、4 歳未満の発症例に異常検査値を多くみとめ、リスクの低い若年層に対する治療法の検討の必要性が示唆された。